



TITLE:

京大広報 No. 407

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 407. 京大広報 1991, 407: 65-76

ISSUE DATE:

1991-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209264>

RIGHT:

京大広報

No. 407

京都大学広報委員会



蔗糖の3,000倍の甘さがあるといわれる *Dioscorea* の実。成分はタンパク質。根茎も食用となる。
—関連記事本文 72ページ—

目 次

<大学の動き>

藤永太郎名誉教授がソ連科学アカデミー	
外国人名誉会員に選ばれる	66
農学部 山田康之教授が日本学士院賞を受賞	66
平成2年度修士学位授与式	67
平成2年度卒業式	67
平成3年度入学選抜学力試験の結果	68
平成3年度医療技術短期大学部	
入学選抜試験の結果	69
平成2年度医療技術短期大学部の卒業式・修了式	69
部局長の交替等	69
平成3年度文学部博物館春季企画展の開催	71

<紹介>

アフリカ地域研究センター	
「熱帯アフリカにおける植物利用に関する データベース (アフロラ)」	72

<計報>

<資料>

平成2年度京都大学職員研修実施状況	74
-------------------	----

<随想>

天神山の麓から	名誉教授 花岡 正男	75
---------	------------	----

<コラム>

ダンテの胸像	文学部教授 岩倉 具忠	76
--------	-------------	----

＜大学の動き＞

藤永太一郎名誉教授がソ連科学アカ
デミー外国人名誉会員に選ばれる

藤永太一郎名誉教授は、1990年8月20日付で、ソ連邦科学アカデミーより、日ソ学術交流の功績をたたえソ連科学アカデミー外国人名誉会員に推戴されるとともに、クルナコフ一般及び無機化学研究所から、アカデミー会員ニコライ・セルゲビッチ・クルナコフ記念メダルが授与された。

藤永名誉教授は、大正8年神戸市に生まれ、昭和16年京都帝国大学理学部化学科を卒業、理学部助手、講師、助教授を経て、昭和35年教授に昇任、理学部化学教室分析化学講座を担当し、昭和57年停年退官、名誉教授。昭和58年奈良教育大学学長、同任期満了、滋賀文化短期大学長、平成元年8月退職、現在財団法人海洋化学研究所理事長。

同名誉教授は、分析化学の分野において独創的な発想により、新たな手法を示し、斯学の発展に尽くしたが、主要な電気分析化学における先駆的な研究は他に比類ないものであり、特に中心となる研究は「微量電気分析法の開発」であって、次の5つの研究に分類される。1) 矩形波ポーラログラフイーによる示差ポーラログラフイーの開発 2) 高正電位あるいは高負電位参照電極を用いる短絡電流滴定法の開発 3) 電流規制ポーラログラフイーの創始 4) 電解クロマトグラフイーとクロポテンシオメトリーの開発 5) イオン電極ボルタンメトリーによる液-液界面のイオン移動反応による電位発生機構の動的平衡論による解析。これらの業績に対し、近畿化学工業会化学技術賞（昭和27年）、日本分析化学会賞（昭和38年）、タランタ国際賞（昭和58年）が授与され、昭和56年英国王立協会で招待講演を行った。昭和61年には、第76回日本学士院賞が授与された。

同名誉教授はその他、数多くの分析化学の業績をあげたが、その先見性と実行力により学界をリードし、国際分析化学会議、ポーラログラフイー国際会議、国際環境科学会議、日米分析化学セミ

ナー、日ソ分析化学セミナーなどを組織化し、また国際純正応用化学連合（IUPAC）アジア・オセアニア代表として世界の化学の発展に尽くした。これらの功績に対し、日本化学会は平成2年名誉会員に推戴した。

（理学部）

農学部山田康之教授が
日本学士院賞を受賞

このたび、農学部山田康之教授に日本学士院賞が授与されることになった。授賞式は6月上旬、日本学士院会館で行われる予定である。

山田教授は、兵庫県出身、昭和32年京都大学農学部を卒業、

同34年本学大学院農学研究科修士課程修了、同35年同博士課程退学後、本学農学部助手に採用され、同37～40年米国ミシガン州立大学フルブライト研究員を経て、同42年助教授、同57年同学部附属生物細胞生産制御実験センター教授、平成2年同学部農芸化学科教授となり、現在に至っている。

同教授の今回の受賞の対象になったのは「植物培養細胞における機能発現並びに物質産生機構の解析」に関する研究である。

この研究は、我が国においても植物細胞培養に関する研究が極めて限られていた約30年前から開始され、以来今日に至るまで、植物の機能発現機構を解明することを目指し、高等植物培養細胞における機能発現と二次代謝産物の産生過程の解析を中心としてなされてきた数々の独創的成果のうえに成り立ったものである。

イネ培養細胞あるいはプロトプラストからの個体再生の成功は禾穀類における細胞工学の先駆的業績であり、本手法を応用した非対称融合によって雑種イネ作出の基盤の技術が確立された。また雄性不稔イネミトコンドリア内の環状DNAの遺伝子解析、コムギ培養細胞のリジン生合成律速酵素の生化学的並びに遺伝子解析、及び光独立栄養培養細胞の育成とその炭酸固定機能、さらにはストレス応答反応の生化学的解明、並びに葉緑体変異株の作成とその遺伝子解析等、数多くの植物

機能の解明において、先導的な業績を挙げている。

さらに高等植物における二次代謝産物産生機能の発現と制御に関しては、特性の異なる細胞のモザイク的存在を認め細胞選抜により高生産性細胞株を育成し、有用代謝産物を大量生産するための基盤を確立するとともに、有機化学・生化学・分子生物学的手法を総合的・体系的に適用し、これらの物質の産生機構を解明した。特にベンジルイソキノリンアルカロイドであるペルペリン並びにビスベンジルイソキノリンアルカロイドのアロモリンの大量産生株の確立と生合成変換過程の研究、及びトロパンアルカロイド、特にスコポラミンの生合成中間物質の変換にかかわる主要酵素の分離・精製と生化学的・分子生物学的解析により、薬用植物の分子育種への道が拓かれるなど顕著な成果を挙げている。

同教授の研究の大きな特徴は、従来高等植物とそれから作成した無細胞システムでは、研究が困難であった植物の機能発現と物質産生機能の解析を、それぞれの目的とする選抜細胞を用いることによって解明することを可能にした点であって、植物の基本的代謝にかかわる重要な多くの諸問題が明らかにされた。これらの研究成果は、実用的に重要な植物成分を大量生産するための普遍的基盤技術を確立することに大きく貢献している。これらの研究に関連して、昭和62年島津賞、及び日本農芸化学会賞を受賞し、平成元年スウェーデンウプサラ大学名誉博士の称号が授与されている。

また同教授は、学内にあっては昭和57年本学農学部附属生物細胞生産制御実験センターの設置並びにその発展に尽力し、また文部省科学官、科学技術会議専門委員、文部省学術審議会専門委員、先端科学技術大学院大学創設準備委員などを歴任するなど、学術行政に貢献した功績も大きい。

以上のような同教授の研究・教育の両面の輝かしい業績を考えると、その受賞はまことに喜ばしい。

(農学部)

平成2年度修士学位授与式

3月23日(土)午前10時から、平成2年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授はじめ来賓臨席のもとに行われ、学位記授与、「総長のことば」があって、午前10時35分終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科64名、教育学研究科16名、法学研究科22名、経済学研究科17名、理学研究科182名、薬学研究科38名、工学研究科581名、農学研究科140名の計1,060名であった。

平成2年度卒業式

3月25日(月)午前10時から、平成2年度卒業式が、本学総合体育館で挙行された。

卒業式は、名誉教授はじめ来賓臨席のもとに行われ、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団、京都大学合唱団が協力)、学士試験合格証書授与、「総長のことば」のあと、「螢の光」を斉唱して、午前10時50分終了した。

新学士は、文学部213名、教育学部68名、法学部384名、経済学部263名、理学部287名、医学部117名、薬学部72名、工学部941名、農学部308名の計2,653名であった。



平成3年度入学者選抜学力試験の結果

平成3年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の前期日程試験は2月25日（月）・26日（火）に、後期日程試験は3月13日（水）・14日（木）に実施した。

学部別の受験者数、合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階選 抜合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率 (%)	(I) 合格者数	(J) 追加合 格者数	(K) 入学者数
文 学 部	240人	人		人	人		人		人	人	242人
前期	205	666	3.2	663	657	3.2	6	0.9	208		
後期	35	412	11.8	256	112	3.2	144	56.3	36		
教育学部	70										75
前期	50	185	3.7	185	181	3.6	4	2.2	55		
後期	20	230	11.5	157	97	4.9	60	38.2	21		
法 学 部	410										416
前期	350	1,110	3.2	1,109	1,092	3.1	17	1.5	357		
後期	60	848	14.1	549	216	3.6	333	60.7	65		
経済学部	270										276
前一般	170	548	3.2	548	535	3.1	13	2.4	175		
期論文	60	323	5.4	273	265	4.4	8	2.9	61		
後期	40	538	13.5	311	107	2.7	204	65.6	44		
理 学 部	326										326
前期	294	1,261	4.3	1,213	1,205	4.1	8	0.7	294	2	
後期	32	1,556	48.6	1,501	1,104	34.5	397	26.4	32		
医 学 部	100										102
前期	90	416	4.6	377	363	4.0	14	3.7	92		
後期	10	307	30.7	210	114	11.4	96	45.7	10		
薬 学 部	80										87
前期	60	180	3.0	180	175	2.9	5	2.8	68		
後期	20	240	12.0	240	144	7.2	96	40.0	23		
工 学 部	1,060										1,063
前期	641	2,189	3.4	2,105	2,079	3.2	26	1.2	641		
後期	419	3,150	7.5	2,933	1,781	4.3	1,152	39.3	428		
農 学 部	325										338
前期	260	733	2.8	732	719	2.8	13	1.8	272		
後期	65	785	12.1	651	368	5.7	283	43.5	71		
小 前 期	2,180	7,611	3.5	7,385	7,271	3.3	114	1.5	2,223		
計 後 期	701	8,066	11.5	6,808	4,043	5.8	2,765	40.6	730		
計	2,881	15,677	5.4	14,193	11,314	3.9	2,879	20.3	2,953	2	2,925

(注) 1. 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

2. 法学部（後期）と経済学部（後期）には、外国学校出身者のための選考試験の志願者72名と42名、第1次選考合格者40名と20名、受験者31名と14名、欠席者9名と6名、合格者20名と6名、入学手続完了者17名と5名がそれぞれ含まれている。

平成3年度医療技術短期大学部 入学者選抜試験の結果

医療技術短期大学部では、平成3年度入学者選抜試験を3月4日（月）・5日（火）に実施し、その合格者氏名を16日（土）に発表した。

受験者数及び合格者数等は次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
看護学科	80人	210人	177人	93人
衛生技術学科	40	322	271	45
理学療法学科	20	132	114	20
作業療法学科	20	99	82	25
計	160	763	644	183

（医療技術短期大学部）

平成2年度医療技術短期大学部 の卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月18日（月）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに、短期大学部卒業式及び修了式を挙行した。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前11時終了した。卒業生は、看護学科77名、衛生技術学科41名、理学療法学科18名、作業療法学科21名で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20名の計177名であった。

（医療技術短期大学部）

部 局 長 の 交 替 等

文学部長

朝尾直弘文学部教授（国史学第二講座担当）が4月1日文学部長に再任された。任期は平成4年3月31日までである。

法学部長

北川善太郎法学部長の任期満了に伴い、その後任として佐藤幸治法学部教授（国法学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

経済学部長

伊東光晴経済学部長の任期満了に伴い、その後任として瀬地山 敏経済学部教授（経済理論講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

理学部長

日高敏隆理学部長の任期満了に伴い、その後任

として丸山和博理学部教授（有機化学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

医学部長

井村裕夫医学部教授（内科学第二講座担当）が4月1日医学部長に再任された。任期は平成5年3月31日までである。

医学部附属病院長

河合忠一医学部附属病院長の任期満了に伴い、その後任として山室隆夫医学部教授（整形外科学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

工学部長

得丸英勝工学部長の任期満了に伴い、その後任として中川博次工学部教授（水理学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

教養部長

山崎和夫教養部長の任期満了に伴い、その後任として木下富雄教養部教授（心理学担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

人文科学研究所長

谷 泰人文科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として吉川忠夫人文科学研究所教授（中国思想研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

胸部疾患研究所長

大島駿作胸部疾患研究所長の任期満了に伴い、その後任として久世文幸胸部疾患研究所教授（生体防御学研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

木材研究所長

樋口隆昌木材研究所長の任期満了に伴い、その後任として佐々木 光木材研究所教授（木質材料研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

ウイルス研究所長

由良 隆ウイルス研究所長の任期満了に伴い、その後任として畑中正一ウイルス研究所教授（がんウイルス研究部門担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

放射性同位元素総合センター長

加藤幹太放射性同位元素総合センター長の任期満了に伴い、その後任として栗原紀夫放射性同位元素総合センター教授（薬物代謝生化学担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

体育指導センター所長

佐野哲郎体育指導センター所長の任期満了に伴

い、その後任として田口貞善教養部教授（保健体育担当）が4月1日任命された。任期は平成5年3月31日までである。

放射線生物研究センター長

武部 啓医学部教授（放射能基礎医学講座担当）が4月1日放射線生物研究センター長に再任された。任期は平成5年3月31日までである。

超高層電波研究センター長

加藤 進超高層電波研究センター教授（超高層物理学研究部門担当）が4月1日超高層電波研究センター長に再任された。任期は平成4年3月31日までである。

留学生センター長

佐野哲郎留学生センター長の任期満了に伴い、その後任として岩井 保農学部教授（水産生物学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。

学生部長

佐野哲郎学生部長の任期満了に伴い、その後任として岩井 保農学部教授（水産生物学講座担当）が4月1日任命された。任期は平成4年3月31日までである。



平成3年度文学部博物館

春季企画展の開催

本学文学部博物館では、下記のとおり春季企画展「先史時代の北白川」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です（身分証明書を呈示）。

記

期 間 4月11日（木）～6月8日（土）

ただし、一般公開に先立ち、本学教職員・学生には10日（水）に特別に公開しますので、多数ご観覧ください。

開館時間 月曜日～金曜日 9：30～16：30

土曜日 9：30～12：00

（入館は閉館30分前まで・日祝日は休館）

場 所 博物館 企画・総合展示室（1F・2F）

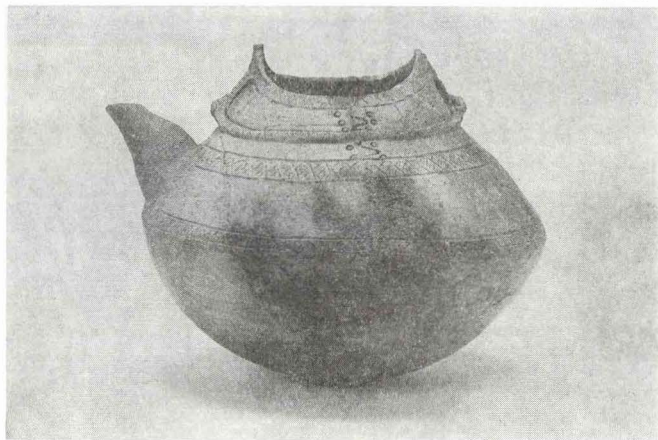
展示内容

企画展「先史時代の北白川」

京都大学がその一角を占める北白川の扇状地には、縄文時代を中心に先史時代の遺跡が集中して分布しています。大学の地元ということもあって、早くから調査がいくたびとなく行われ、その成果が文字のない時代の歴史を明らかにするための重要な資料として活用されてきました。文学部博物館が所蔵する北白川小倉町遺跡などの遺物に、京都大学埋蔵文化財研究センターによる北白川追分町遺跡など京都大学構内の遺跡の研究成果も加えて、先史時代の文化と環境を解説し、あわせてこの地域の特徴を考えてみることにしました。

このほか、併設展「東大寺の行事と文書」では東大寺の協力をえて、館蔵資料を中心に修二会

（お水取り）並びに寺の歴史を語る古文書・用具を展観、図録の発刊にあわせて「日本の肖像画」を、また考古資料では「日本古代文化の展開と東アジア」を同時にご覧いただけます。



注口土器 一乗寺向畑町遺跡出土

この資料は、帯状にめぐらした縄文で飾った近畿地方の縄文時代後期を代表する優品である。

＜紹介＞

アフリカ地域研究センター

「熱帯アフリカにおける植物利用に
関するデータベース(アフローラ)」

アフリカ地域研究センターでは、昭和61年の開設以来、アフリカにおける自然・人・文化に関する総合的研究を推進してきた。個性的で多様性に富んだアフリカ地域の特性を広義の生態学的方法によって把握するとともに、環境破壊や開発問題など、今日アフリカが抱える現実的な問題についても、地域の実情に即した対策を模索するという立場から研究を進めてきた。また、こうした基礎的・応用的な問題に取り組む一方で、アフリカ地域に関するわが国唯一の情報センターとしての機能を果たすために、文献、地図、標本などの資料のほか、アフリカに関するさまざまな情報の収集にも努めてきた。そうした活動の一環として現在進行中の熱帯アフリカの有用植物に関するデータベース作成のプロジェクト（アフローラ・プロジェクト）について紹介する。

わが国では、過去30数年に及ぶ現地調査によって、アフリカの植物とそれについてのアフリカ人の認知や利用に関して多くの植物学的、民族学的なデータが収集されている。しかしこれらのデータのほとんどは、これまで研究者が個人的に保管して利用してきたにすぎず、一次データを公表したり、それに基づいて比較研究を行うといった体制はまだ整えられていない。そこで、これらの個人の手元に埋もれがちなデータを一定のフォーマットにしたがって集積し、データベースを構築する。このデータベースによって、アフリカにおける有用植物資源の実態把握を容易にするとともに、民族学、植物学、農学などさまざまな分野における研究、あるいは自然の保護やその持続的利用計画のために必要な基礎資料を提供する。さらに、今後ますます蓄積されてゆくこの種の資料の収集に対するガイドラインを与えるというのが、このプロジェクトの目的である。

アフローラに収められる情報は植物学的情報と民族学的情報に大別される。まず植物学的情報には、植物の学名のほかに、採集地、生育場所、生

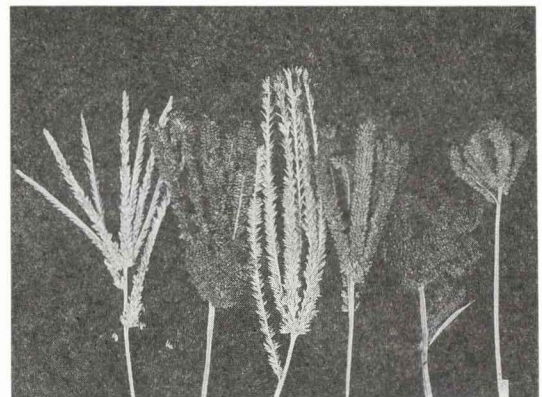
活型、頻度、その他のいわゆる植物学的情報が含まれる。また、標本所在地や標本番号、採集者、標本同定者を明記して、標本と情報のトレースができるようにする。つぎに民族学的情報としては、民族集団名や使用言語、方名とその語源、インフォーマントなどに関する情報とともに、用途の詳細な記載と用途分類及び使用部位分類にした

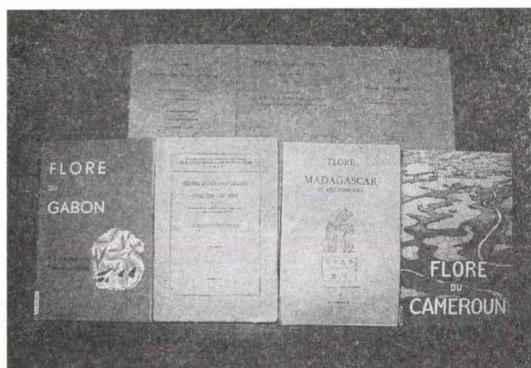


有用植物の豊庫、アフリカの熱帯多雨林



アフリカ産シコクビエの変異

染料用植物 *Rothmannia whitfieldii* (Lindl.)
Dandy (アカネ科)



アフロラ関係図書の一部

がった分類コードなどが記載される。これまでにこうしたフォーマットにしたがって約6,000件の一次データを入力したほか、文献資料などから数千件に及ぶデータが集められている。

この種のデータベース化の試みは海外でも行われている。たとえば、イギリスの王立植物園（キュー・ガーデン）では主として世界の乾燥地域の植物利用を中心にデータベース化の作業が始められている。また、ベルギーやフランスなどではアフリカの伝統的薬用植物に関する情報を集積しつつある。これらのデータベースと本センターのアフロラとは以下の点で異なる。まず、アフロラは、薬用植物だけでなく、食用植物や儀礼用植物、道具、建材、装飾、染料などのさまざまな物質文化に用いられる植物をも含むほか、蜜源や家畜、野生動物の餌などの間接的用途をもつ植物をもカバーする汎用データベースである。つぎに、キュー・ガーデンのものなどが植物の分類群別、つまり種ごとに情報がまとめられているのに対して、アフロラでは地域ごと、民族集団ごと、調査者及び採集標本ごとに情報が区別されている。これによって民族間、地域間の比較を容易に行うことができるが、キュー・ガーデンのものは同一種に関して世界各地から集められた情報がひとつのレコードにまとめられているので、そのような比較研究をするのには不便である。これは、データベースを主として新たな有用植物開発のための基礎資料提供といった目的に使うのか、それとも植物利用の比較を通して文化や地域の特性を明らかにすることにも用いるのかといった使用目的の相違にもよるものであろう。

本プロジェクトを通して、アフリカ人の自然観やその豊かな知的蓄積についての理解が深まるとともに、木材としての用途以外に植物がもつ多様な潜在力が明らかになると期待されている。

（アフリカ地域研究センター）

訃 報

臼井 二尚 名誉教授

本学名誉教授臼井二尚先生は、3月8日逝去された。享年90。

先生は、大正15年京都帝国大学文学部を卒業後、大学院を経て昭和4年4月京都帝国大学文学部講師、同7年7月助教授、同19年9月教授に就任、同38年8月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。この間、昭和23年11月から2年間京都大学評議員、同26年9月から翌年8月まで文学部長として大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、大谷大学文学部教授を経て、関西大学社会学部教授、同学部初代学部長として尽力された。

先生は、社会学の原理論を基礎として、社会学の方法論や民族、村落等の領域に広く及ぶ研究において優れた業績を残された。主な著書に『社会学論集』、『日本人の自殺』（共編）等があり、その他『日本村落調査細目』により日本全国各地の村落につき組織的な実態調査に尽力された。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し昭和46年11月には勲二等旭日重光章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（文学部）

〈資 料〉

平成2年度京都大学職員研修実施状況

大学における職員研修は、官職の職務の責任の遂行に必要な知識・技能等を修得させ、かつ職員の能力・資質等を向上させることを目的として実施するものである。

平成2年度における本学主催の職員研修実施状況については、次の表に掲げるとおりである。

なお、平成2年度の特色としては、平成元年度に引き続きさらに研修の拡充を行い、①研修参加者数が対前年度85名増の550名となったこと。②新採用職員研修で初の合宿研修を実施したこと。③国際交流等に対処するため初の語学研修（英語・初級）を実施したこと。④技術職員研修が今年度で一巡したことなどが挙げられる。

研 修 の 名 称	実施期間	対 象	受 講 者 数			研 修 場 所
			男	女	計	
新採用職員研修	4/17～4/20 (4日間)	新採用職員	43	30	73	国立若狭湾少年自然の家
主任研修(第1回)	5/16～5/18 (3日間)	主任(他機関を含む)	32(8)	18(1)	50(9)	関西地区大学セミナーハウス
〃(第2回)	11/13～11/16 (4日間)	〃	28(6)	19	47(6)	国立曽爾少年自然の家
監督者(係長級)研修	10/3～10/5 (3日間)	係長(他機関を含む)	24(7)	8(1)	32(8)	農学部附属水産実験所
技術職員研修(第4回)	7/17～7/19 (3日間)	行(一)教室系技術職員	54	8	62	附属図書館, 理, 情セ
〃(第5回)	2/12～2/14 (3日間)	〃	64	6	70	〃
中堅職員研修(第2回)	6/12～6/14 (3日間)	事務系職員 (採用後3年～5年)	33	22	55	京大 会館
〃(第3回)	8/27～8/29 (3日間)	〃 (採用後5年～10年)	39	21	60	〃
〃(第4回)	10/16～10/18 (3日間)	〃 (採用後10年以上)	48	24	72	〃
実務研修(施設系)	10/16～10/18 (3日間)	施設系技術職員	9		9	経済学部特別講義室
語学研修(英語・初級)	10/23～2/22 (60時間)	事務系職員	6	14	20	附属図書館, 教養部LL
合 計			380(21)	170(2)	550(23)	

() 中は他機関の受講者数で内数



＜随想＞

天神山の麓から

名誉教授 花岡 正男



退官になった気楽さもあり、一昨年夏、まだ壁が聳えていた西ベルリンでの国際免疫学会議のあと、南下して、北イタリアのパドヴァに暫くいた。ローマ時代からの環境に囲まれた静かな大学町にやってきたのは、スクロヴェニ礼拝堂の壁画をみるためでもあった。素朴で硬い筆使いのなかにも、鋭くまたは柔かく、それぞれの視線を交しあう人物像が印象的な、聖母とキリストの一代記は、門外漢の心を打つものがあつた。ジョットがこの壁画を描いた80年余り前の1222年、町の中心部に、パドヴァ大学が開設された。その区域は、今も大学本部などに使われている。古い付まいを今に残し、列柱が並ぶ二層の回廊をめぐる建物がコルテを囲む一郭に、学生が住きかっていた。夜、涼を求めて再び行ってみると、そのコルテで演奏会が催され、古い建物と敷石にひびく音色を聞きながら、日本の大学では、なかなかこんなムードは出せないと思ったものである。

この本部のなかに、1594年に建てられた解剖学の講堂も残っており、屍体解剖が示説された面影を今に伝えている。パドヴァ大学を訪れたゲーテは、「イタリア紀行」のなかで、大学の建物のみかけは堂々としているが、その狭さ、とくに解剖学講堂では、学生が圧縮されて講義をうける形になると驚いている。多分それより粗末な建て替え前の講堂で、近代解剖学学生みの親ヴェザリウスが講義をし、この狭い大学で、ガリレオが名講義で学生を惹きつけ、コペルニクスや血液循環生理学のハーヴェイら、欧州各地からの俊英が学び育った。

この古く狭いパドヴァ大学の話をして、昨年の入学式で新入生に話したが、それにおとらずこじんまりとした「京都医療技術短大」をあづかって2年たった。国立大の附置研究所から、私立で教育が専らの短大へと、違うことが多すぎて、戸惑いながらも、退官の翌日から何とかしのいできた。この短大は、昭和の始まりと共に、島

津製作所内に開設された「レントゲン講習所」に端を発し、今のところ、診療放射線技術学科だけで、放射線技師の養成に当たっている。

「短大のキャンパスは、園部盆地を取囲む山の一つ、天神山麓にあり、生前から菅公を祀ったという生身天満宮と背中合せに、新装なった園部駅を見下している。キャンパス内を猿が走ったとも聞き、雪が積れば狸の足跡がみられる。鳥の啼声だけは、四季絶えることはない。環境はよいが、ここで4年制の同じ学科の大学と匹敵する教養、医学、工学にわたる内容を3年間で教えようというのであるから、先生も学生も大変である。

現在、コンピュータを組みこんだ大型機器が示す画像で、体内の局所をみながら、病気の診断と治療をすることが脚光を浴びている。造影剤で浮び上った体の一部の血管網を立体像へ変換したり、動脈か静脈の一方を消してしまう、さらには、血管内造影剤の流れを刻々記憶させ、動画を作りだす。これをみれば、どこでどの程度血流が悪くなっているか、一目瞭然である。そのところへ、皮膚に近い太い動・静脈から、細い管をくぐらせ、血管がつまっていれば、風船で拵けてしまう。そこに、限局された癌病巣があれば、すぐ近くの動脈まで管をくりこんで、その部分を閉塞して血流を絶つか、薬剤を集中的に送りこんで、癌細胞を退治する。造影剤やX線を使わなくても、水分子の分布の違いを読みとる、核磁気共鳴映像法でみれば、臓器内の構造の変化や血流の異常も、やはり動画にしてブラウン管に映し出せる。どの方法をとるにせよ、鮮明な画像が映しだされなければ仕事にならない。そこが、機器の性能を熟知した技師の腕の見せどころである。病理検査技師がきれいな組織標本を作ってくれなければ、経験豊かな病理医でも、確信ある診断ができないのと同じである。この医師と放射線技師とが呼吸を合せて診断・治療に当る方法の基礎と応用を究めるのが、京都大学の気風から最も嫌われる意味の単語を冠した、interventional radiologyで、適当な訳語もない。しかし、気楽者の多いわが短大では、学生を鍛えあげるのに、彼らにどう「介入」してゆくか、頭のいたいところである。(はなおか まさお 元ウイルス研究所長 平成元年退官 専門は血液病理学、免疫細胞学)

洛書

このたび本学
附属図書館に立
派なダンテの胸

像が寄贈された。寄贈の主は、附属図書館所蔵のダンテ文献のコレクション「旭光文庫」を寄贈された故大賀寿吉氏のご令孫に当たられる松井恵美子さんであるとうかがった。

世界的大詩人がどのような風貌の持主であったかということは、なかなか興味をそそられるところである。ダンテの

同時代人であり、『神曲』の中で出藍の誉れと讃えられているジョットの描いたものが詩人の最古の肖像であろう。その絵は、今日でもフィレンツェの国立美術館で鑑賞することができる。このいかにも「若き学究の徒」といった端麗な面立ちのダンテ像は、ダンテ関係の文献などの挿絵としてしばしば登場するので、あるいは皆さんのお目に止まっているかもしれない。美術史家の始祖ヴァザーリはこの肖像が、「生きている人物を巧みに自然らしく描いた」ものだと絶賛

している。ダンテよりほぼ五十歳年少のボッカッチョは、この尊敬してやまぬ同郷の詩人の風貌をこんなふうに捉えている。「顔は面長で、鼻は鷲鼻、眼は大きめで、頬骨が張り、唇は下唇が出て受け口であった。顔の色は褐色で、黒い

髪の毛と髭は濃く、ちぢれていて、いつも不機嫌な物思いにふけるような顔つきであった」。

さて、今度ご寄贈いただいたダンテの像は、威風堂々とした中年の哲人といった面影がある。今世紀初頭の彫刻家の手になる作かと思われる。おそらく大賀氏が昭和の初期に渡欧された時、求められたものであろう。大賀氏は一生をダンテ研究に捧げられ、多年にわたりダンテ関係の文献収集に努められた。その貴重なコレク

ションが、本学の誇りとする「旭光文庫」にはかならない。ダンテ研究に携わるものはこの文庫から大恩をこうむっている。

同氏の畏友であり、『神曲』（岩波文庫）の訳者である山川丙三郎は、その「おくがき」で次のように述べている。「大賀寿吉氏の逝去は我国に於けるダンテ研究途上の一大損失であった。ダンテに対する氏の熱愛とその真摯な態度とは誠に稀にみる所であって、或は講壇に立ち、或は文筆を馳せ、書庫を開放し、或はまた後進の学徒を集めて『神曲』を講じ、孜

孜として斯学の興隆に力めた」。

この胸像は、いま附属図書館4階の応接室に安置され、ひっそりと「旭光文庫」を見守っている。

（いわくら ともただ 文学部教授）

ダンテの胸像

岩 倉 具 忠



（本学附属図書館所蔵）